

原子力発電所崩壊；事故ですか？事件ですか？

2017-4-1

東京電力の福島第一原子力発電所は2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震によりメルトダウンを起こしました。私は日本環境教育学会の広報紙『環境教育ニュースレター』（2012.7.15）に、次のように書きました。「東北地方太平洋沖地震に伴う東京電力福島第一原子力発電所の崩壊は今までになかった人為災害、遺伝的変異を引き起こす放射性物質による公害に進展している。水俣病の深刻化と同じような経過をたどらないようにしてほしいが、権限に伴う責任がある行政府、直接の管理責任のある特定企業、関係科学者の沈黙や事実非公開や虚偽などを知るにつれ、私たちは公害の現代史から学んできたとは思えない。」それから6年たちましたが、残念な予測は当たっていると思います。

緊急電話を110にすると、「事故ですか？事件ですか？」と聞かれるようです。「福島原発事故」と世の上言われていることは事実の理解とその表現の誤りで、福島第一原子力発電所の崩壊は「事故」ではなく明らかに「事件」なのだと私は考えています。

ベラルーシの高校生との交流会『今、原発事故後の社会に生きる——チェルノブイリと福島と私たち』（2017.3.25）に参加して、彼らの学習活動の経験を聴講しました。ベラルーシはチェルノブイリ原発事故（1986）による放射性物質の直接汚染がひどかった国でした。30年を経た被災地区にあるストレリチェヴォ中等学校のクラブ活動「エーデルワイス」では、生徒たちが身の回りや食材の放射線量の測定を続け、また、「失われた村」を記憶する環境保全活動を続けています。比較的低い放射線量であっても、汚染された地域で内部被ばくによる健康被害を避けるように、暮らす方法を学んでいるとの報告がありました。戦争（ドイツ軍の侵攻）と放射性物質汚染（チェルノブイリ原発事故）から、祖父母たち村人が大好きな村を守って、住み続けてくれたことへの感謝と、尊敬の想いを語っていました。将来、彼らは映画監督になってドキュメンタリーを制作したい、医者になって地域医療に関わりたいと話しました。

チェルノブイリ原発事故に関する歴史的情報は次のように記されています。「…ベラルーシの領土には原子力発電所は一基もない。…一九八六年四月二六日午前一時二三分五八秒、爆発が起こり、チェルノブイリ原発第四号炉の原子炉と建屋が崩壊した。チェルノブイリの事故は科学技術がもたらした二〇世紀最大の惨事となった。…事故の結果、大気中に五〇〇〇万キュリーの放射性核種が放出されたが、その七〇パーセントはベラルーシに降ってきた。…長期にわたる低線量放射線の影響の結果、わが国では、がん疾患、知的障害、神経・精神障害、遺伝的突然変異を持つ患者の数が毎年増加しつつある（『チェルノブイリ』集、ベラルーシ百科事典社、1996）。」

他方、フクシマ（ヒロシマに対応する表現）後、6年を経て、日本の大学生・院生も体験を率直に語りました。福島出身の学生は心中の葛藤について話しました。父は会社経営のために福島に残り、母と子どもたちは東京に避難しました。家族が別れて暮らすことに父は反対、母は子供の安全を思い、東京に避難することを望みました。家族で真情を露わに

話すことはとても困難で、今、それを越える話し合いがやっとなできるようになったそうです。福島出身でない学生はどのように被災した人々と関わればよいのか、同情以上の何ができるのか、思い悩んでいるようです。若い人たちが、正直に思いを語り合える機会は貴重だと思いました。

私は民族植物学ノート第10号(2017)に、公害「原発崩壊事件」について、次のように書いています。

アレクシエーヴィッチ(1997)は市民の個人史をインタビューして文章化しています。彼女は自分自身に対しても同じようにインタビューし、他者が語ったかのような客観的描写に徹しています。彼女の本は涙なしに読めませんでした。他者が心の中に深くしまい込んだ思いを聞き取ることは容易なことではありません。当然、誰しも辛いことは話したくないのに、反面では信頼できる人に聞いてほしい気持ちもあるのでしょうか。しかし、話し手の信頼を得ることは簡単なことではありません。あまりに惨すぎる体験をした人から、率直なインタビューをすることができた彼女は素晴らしい人だと思います。聞き手も話し手も、時の権力者から強い圧力を受けただろうし、それでも市民の体験した事実を記録することは、「物凄く」大事なことです。権力者が創作し、書き直された戦争の歴史は事実ではなく、虚偽が多いのです。市民個人それぞれに人生はあり、そこに歴史の原点があるのだと考えます。

福島原子力発電所の崩壊後の経過措置はチェルノブイリの事後措置の過程と酷似しています。発電所近隣の住民に事実が早く十分に知らされずに(隠され)、即応した措置がなかったために、被爆した人々が多いと考えられます。最優先は当事者による現場での対応、即応した支援体制が必要であったのに、当時の対応経過を時系列で再構成した資料を見ると、会社や政府の混乱が現場対応を遅らせ、被害を広げたようです。これとて、水俣病での対応措置と酷似していて、事実隠しから被害が拡大した公害の歴史から学んでいないといえます。福島原子力発電所の崩壊はチェルノブイリの事例に勝るとも劣らない、「過酷事故」レベル7だったことが追認されました。

一時は、首都圏住民を含めて5000万人の避難まで想定された福島原子力発電所の過酷事故にも懲りずに、また、現在も、事故処理が進まずに、多くのことが隠されていると疑われ、後追いで公表されているだけでも多量の放射性物質を海にも流しています。事実を隠すことが風評被害と現実被害を拡大しています。長期的には福島原子力発電所の廃棄処理を、期日を決めて行わねばならないと考えます。福島の事後措置はチェルノブイリから学び、まず被災者の救援で、移住を含めて全面的に速やかに生活や健康被害の補償をすべきです。チェルノブイリでの居住禁止区域や移住必要地区と比較して同放射能汚染地区に、福島の場合は、居住し、また中央政府が近い時期に帰還させようとさえしています。中央政府と東京電力の責任において、少しでも早く被災地域住民への移住を含めた補償を最優先すべきだと考えます。

しかし、チェルノブイリによって世界が変わったとまで、アレクシエーヴィッチが言ったと同レベルのフクシマ（事件）があったにもかかわらず、一旦停止した全国の原子力発電所は中央政府の政策で再稼働に向かって進み始めています。被害者を救済もせず、東京もそれなりに汚染され、今後も汚染の恐れがあるのに、それも忘れてしまおうと、東京オリンピックに資金（税金を含め）や建築資材や、色々なものが流されています。オリンピックで一部の方々に「夢」を与えても、現実には福島から拡散した放射性物質による環境汚染は現在進行形で少しも解決に向かいません。中央政府も東京都も、ぜひともオリンピック開催を速やかに返上して、フクシマ原子力発電所への対処、地震被災地への復旧・復興支援に全力をかたむけるべきだと考えます。

強度に汚染された地区には帰らないで他所に移住すべきです。政府と東京電力は第一に全面的な責任を取って、この地区の人々の移住補償をすべきです。何とか低度汚染地域である東京などでは、ベラルーシの高校生たちのように、内部被爆を避ける暮らしぶりを学び、実行すべきです。私は、家族の食材はできるだけ自給農耕し、汚染地域の食材は用いないようにしています。「風評被害だ、非情だ」と言われても、問題は未だに解決に向かっていない以上、ベラルーシの高校生たちのように家族や地域社会の安全を確保することが大事です。情緒に流されず、現実をよく見て、各自が判断すべきです。

東京も低度ではあれ汚染されているのです。どこまでが我慢できる程度なのかは、過去に事例が少ないので、分かりません。フクシマを「差別」というのは問題のすり替えで、あつてはならないことで、本質は現実を隠さないで、強度汚染地区の人々の生活に関しては無条件全面保障をすることです。

これからの数十年、文明の有様は激変するでしょう。しかし、私はもう人生を重ねているので、それを見届けることはできません。第三の人生では、自分の名利のために何かをすることはないので、次世代のために何ができるのかと考えました。若い人々の話は経験が少ないので、皮相で一面的な内容が多いようです。しかし、このところ、私が経験の「豊富さから多面的」、「偉そう」に語ると、彼らを委縮させ、発言を遮ってしまうようで、恥ずかしながら、私は言葉をついに失いました。自ら消しきった自らの言葉はとても強いストレスを跳ね返してよこし、私は心苦しくなりました。そこで別の表現方法を考えました。言葉は直接発して、若い人びとの発言を遮りますが、文章は読みたい人だけが読むので、その場で強要することはしません。ほとんど誰も読むことのないホームページに、ベラルーシの高校生たちのように経験を記録し、思索を深めて文章化することにします。

参考文献

アレクシエーヴィッチ, S. 1985 (三浦みどり訳 2005)、ボタン穴から見た戦争——白ロシアの子供たちの証言、群像社、東京。

アレクシエーヴィッチ, S. 1997 (松本妙子訳 2011)、チェルノブイリの祈り——未来の物語、岩波書店、東京。